

IV 生活 1年次の成果と課題

1 成果

(1) 現状の自己評価となる、思いや願いの実現度合を判断する場の設定

子どもが思いや願いをもってその実現に向けて対象に働きかけていく中で、思いや願いの実現度合を判断する場、つまり、今の自分は何ができていて何ができていないのか、現状の自己評価する場を設定した。これにより、子どもは単元導入で生まれた思いや願いを更新しながらもち続け、その実現に向かって意欲的に活動する姿を継続して見られたのが成果である。

現状を自己評価するには、働きかける対象の様子または自分自身の働きかけを振り返る必要がある。自己評価の場では、評価した理由を考えることにしたため、「〇〇はできているが、△△にはなっていないから80点」というように、働きかける対象の様子や自分自身の働きかけを、思いや願いの実現度合と関連付けて考えながら価値付けする姿が見られた。これにより、活動することだけに満足するのではなく、「△△になるようにしたいから□□をしてみよう」と活動後に実現される思いや願いを意識しながらの活動状態を維持することにつながった。また、「次は△△になるようにしたい」というように、思いや願いの実現に足りなかった部分を補おうとより意欲的に働きかけようとする姿も見られた。

(2) 思いや願いの実現度合を判断する視点を生み出す、気づきを分類して考える場の設定

前述した思いや願いの実現度合を判断する場を設定する前に、活動を通して得た気づきを分類して考える場を設定した。これにより、対象や自分自身を見つめる視点が生まれ、その具体的な視点である学びのものさしに着目しながら現状を自己評価することができるようになったのが成果である。

子どもは気づきを分類して考えることで、植物の「葉」や「茎」、学校や地域にある「部屋」や「建物」などの対象の部位や種類、五感を働かせて得られる「音」や「におい」などを視点として獲得した。この後に自分の気づきを振り返る場を設定することにより、自分はどの視点に着目した気づきが多いのか少ないのか、自分が着目しなかった視点で考えるとどのようなことがいえるのか、得た視点に着目して現状を自己評価する姿が見られた。1年生「きれいにさいてね」では、「大きくなったから生長した」と表現していた子どもは、「茎が太く長くなり、葉の数が多いから生長した」と得た視点に着目して対象について具体的に表現できるようになった。また、1年生「あきとあそぼう」では、おもちゃの音や重さに着目した子どもは、「無音だから高い音が出るように」「重いから園児でも持てる軽さに」というように、今後の自分の働きかけを調整しようと具体的な見通しをもつことができるようになった。

2 課題 気づきの質を高める学びのものさしを生み出す手立て

子どもは、質の高い気づきとはどのようなものかを十分には理解しておらず、自分自身の気づきの質の高まりを実感できていない。気づきの質について、教師と子どもが共通理解をしながらどのように気づきの質を高めていくかが課題である。

2年生「とびだせたんけんたい」では、「信号が多いからこの地域は安全だ」というように、自分の中で何か気づきがあったとして、そこに内在している関連のある気づきに無自覚な状態である子どもが多く見られた。まずは「車がある」という気づきを自覚することから始まり、「信号で車が止まる」というようにそれらを関連付けて考えることで、いずれ「信号があると安心して歩けるから安全」というように自分自身についての気づきにつながると考える。自分自身についての気づきは対象への働きかけも含まれる。対象の様子と自分自身の働きかけを関連付けて考えられれば、成果に挙げている、思いや願いの実現度合の判断、つまり現状の自己評価がより妥当なものになると考える。気づきの質の高まりが思いや願いの実現に近付くために不可欠だと考える。気づきの質を高める学びのものさしを生み出す手立てを探っていきたい。